戦後60年記念

# 佐伯・ホノルル友情都市契約締結の功労者　赤松勇二さんを悼む

桧垣七郎
（会員　佐伯市下久部）

大平洋戦争開戦の日、昭和十六年十二月八日未明、航空母艦から飛び立って真珠湾攻撃に参加した搭乗員のうち、数少ない生き残りであった赤松勇二さんが平成十六年一月九日に急逝された。八十三才であった。

§

赤松さんは旧姓山口で宮崎県都城市の生まれである。

飛行機乗りに憧れて、昭和十二年六月一日　横須賀海軍航空隊に航空兵として入隊した。

厳しく困難な教育訓練を経て、艦上攻撃機（雷撃機）搭乗員となり、日中戦争では中国大陸の戦線で奥地爆撃などに参加していた。

大平洋戦争開戦の時は、航空母艦「加賀」の雷撃隊員として第一次攻撃隊に参加して、真珠湾のネバタ型戦艦に魚雷を命中させる偉功を立てた。

昭和十七年六月のミッドウエー海戦では、乗艦「加賀」が撃沈されたが、その際飛行甲板に落ちた爆弾の爆風で艦の鉄壁に頭を打ち付けて一時失神したが、辛くも意識を取り戻し、大きく傾く母艦の飛行甲板を、勢いをつけるため助走して三十メートル下の海面に飛び込み、浮遊物につかまって漂流中を味方の駆逐艦に救い上げられて九死に一生を得るというきわどい事態もあった。

その前の昭和十七年五月の珊瑚海海戦にも参加、昭和二十年になると沖縄海域に押し寄せたアメリカ艦船に対して、主に鹿児島県の串良基地から飛び立って、艦船に対する夜間雷撃などに参加して活躍するうち終戦を迎えたわけである。

このように日中戦争から大平洋戦争にかけて主要な戦闘に参加して勇敢に戦い抜き生き抜いてきた真に歴戦の勇士である。

§

自分の功を誇ることをしなかった謙虚な赤松さんが時

折語っていたお話の中から、そのお人柄をしのばせるようなことなどを私なりにまとめて書き残しておきたい。

§

（1）臨機応変

㋐母艦から飛び立って真珠湾に向かう機上では、中国戦線での戦闘経験があるにもかかわらず極度に緊張して、発艦の時に整備員が心づけとして渡してくれた一升壜（ビン）の酒をラッパ呑みしても少しも酔わず声も出なかった。

いよいよ真珠湾のアメリカ艦隊に向かって突撃する時には、湾岸のヒッカム飛行場の地上で右往左往するアメリカ兵の姿がよく見え、超低空のためプロペラの風で木の枝葉が強くそよぐのが見えた。

そして目標にしたネバダ型戦艦の横っ腹に首尾よく魚雷を命中させることが出来たのである。

魚雷投下後は敵艦のマストをスレスレに飛び越して右（左？）旋回して避退するようあらかじめ指示されていたが、赤松さんだけは反対の方向に避退した。これは同じ第一次攻撃隊ながら一番艦の空母「赤城」の雷撃隊が先攻したためにアメリカ側の対空砲火もようやく激しくなり、二番艦の赤松さん達の空母「加賀」の攻撃隊の時にはアメリカ側の迎撃体制も整い、指示どうりに右旋回して避退すれば正確な砲火にさらされて撃墜される可能性が強かったのである。

赤松さんは「俺は軍紀違反だ」と笑っていたが、それでも乗機には四発の弾痕があった。

㋑昭和二十年の沖縄海域のアメリカ艦船への夜間雷撃のため鹿児島県の串良基地を飛び立ち、普通のコースを辿らずに中国大陸方面へ迂回して、艦船護衛のため待ち受けるアメリカ戦闘機の裏をかき、思わぬ方向から雷撃を敢行して帰って来ていた。

§

（2）沈着冷静

空母の搭乗員で特に偵察員は、敵の空母や艦隊等を攻撃する戦闘では、目標一つない大海原で行動中の母艦を飛び立って敵の艦を探して攻撃した後自分の母艦に帰って来る航法を担当している。

攻撃に向かう時には或程度冷静に航法ができるが、敵艦を発見していざ戦闘となると異常な精神状態となる。戦闘が終るとまた自分の乗機の位置（機位）を測定し

て行動中の自分の母艦に帰って来なければならない。現代のような精密なナビゲーションのなかった当時、冷静な精神をとり戻して簡単な計算尺などを使った航法で、大海原の中の極小な一点の自分の母艦に帰り着くことは、想像を絶する困難な心細い作業で、私達から見れば神技としか思えない。

場合によっては、護衛のため同行した一人乗りで偵察員の居ない戦闘機をまとめて帰艦誘導せねばならない責任重大な時もある。

経験浅い若い搭乗員が戦闘終了後、自分の機位を失して母艦を探し出せずに燃料が尽きて海に落ち、無念の戦死を遂げた人達もあったのである

※沖縄海域のアメリカ艦船に対する夜間雷撃に出撃した時、自分の乗機の位置がわからなくなりかけた時があった。

海上の暗闇の中を飛ぶうち、かすかに硫黄のにおいを機上で感じ、ここは鹿児島の硫黄島近くであると判断し、その島の位置を頭の中に描きこの方向に行けば必ず九州の陸地があり飛行場がある筈だと信じてコースをとり、無事に基地に着陸できた。

またある時夜の海上に不時着してペア（同乗者）と漂流中、その後輩に星の位置や航法を教えたこともあった。

このように度々の海戦に参加しながら生き残ったということは、臨機応変の行動により対空砲火の致命的な被弾がなかったことや、敵戦闘機の捕捉攻撃を免れたこと、また危急の場合にも冷静さを失わずに沈着に航法を誤らなかったことなどタフな精神力、行動力を何よりも雄弁に物語るものであろう。

§

（3）友愛

㋐昭和二十年四月頃、赤松さんの部隊は別府湾で夜間雷撃訓練をしていた。

赤松さんの乗機の操縦は山口八郎大尉（ミッドウエー海戦で戦死した山口多門少将の甥）後の席には電信員の下士官も乗っていた。

超低空での訓練中、乗機は別府湾に突っ込んだ。

海中に潜った飛行機の中から脱出するときに、赤松さんは山口大尉を助け出そうと水中で彼を手探りで

探したが座席で固くベルトを締めており、失神したのか動かない大尉をどうすることもできずに浮上し、電信員と共に漂流中を艦からの探照灯で探し出されて救出された。

漂流中の寒さと疲労と救出された安心感のためその場で意識を失い気がついたら亀川海軍病院のベットの上だった。

海軍では日頃犠牲的精神、戦友愛ということを事毎に教育されるが、いざその場に直面した時に自分の身をかえりみず戦友を救おうとすることは、なかなか出来ることではない。

㋑数多い海軍の兵士の中でも搭乗員は特別扱いで、食料品やタバコなどの嗜好品等は豊富に支給されていた。

整備兵、水兵等他の兵科の兵士達はタバコ等は常に不足の状態だった。

これをよく知っている赤松さんは、これらの兵士達に二階の窓から「お前らこれを吸え」と言って多量のタバコを撒いてやったこともある。

また他科の兵士に比べて給料もよく、お金を使うような機会も少なかった中国大陸の航空隊で、同年兵の整備兵が外出するのにあまりフトコロが豊かでないことを知って、自分の財布の中から多額のお金を「持って行け」と言って与えたことがあった。

その人が赤松さんの暖か味を忘れられず六十年ぶりくらいに熊本からわざわざ訪ねて来て感激の再会を果たしたこともあった。

㋒赤松さんは戦後海原会（東京に本拠を置く旧海軍飛行兵の全国的な組織）とハワイのパールハーバー会の共催の日米合同慰霊祭に毎年参加していた。

その際、開戦の日に赤松さん達の攻撃隊を迎え撃ったアメリカ戦艦ウエストバージニアの信号兵だったリチャード・フィスケさん（当時十九才）や真珠湾岸のヒッカム飛行場で対空戦闘の指揮をとったデンバー・グレイさん、戦後生まれだがハワイの大学教授のジョン・デバジリオさん達と友情を交すようになり、中でもフィスケさんとは意気投合して「アカマツ、俺の気持ちがわかるか」と言って抱きついて涙を流したこともあった。

かって敵味方に分かれて戦った顔も見知らぬ者同士

が、恩讐を超えて裸の人間として素肌を触れ合った時、赤松さんのお人柄の中に洋の東西を問わぬ暖か味を感じて、フィスケさんの心を揺さぶるものがあったのではなかろうか。

§

赤松さんとハワイの退役軍人たちとの交流も回を重ねて、平成十一年十月にはリチャード・フィスケさん（パールハーバー会会長）デンバー・グレイさん（パールハーバー会副会長）ジョンデバジリオさん（ハワイの大学教授）の三人と、東京の海原会から吉野治男さん（千葉県の人、赤松さんと同じ母艦「加賀」から飛び立ち、同じ隊で雷撃隊員として攻撃に参加した人）、石井厚司さん（宇佐航空隊で特攻出撃待機中に終戦を迎えた人）、吉田次郎さん（予科練出身で海原会の役員）の三人が佐伯に来訪し、大入島の海人夏館に宿泊して私達も参加させてもらって懇親会を開き大いに友好を深めることができた。その翌日、平和祈念館の隣地に「友好の桜」三本を植樹、一本は赤松さんとフィスケさん、一本は吉野さんとグレイさん、一本は当時の小野市長とデバジリオさんが植樹、赤松さん吉野さんらの攻撃隊を迎え撃ったフィスケさん、グレイさんらかつて敵味方に別れて命を賭けて戦った者同士が手をとり合って植樹する姿は感動的で人間の和解の可能性を感じさせるものであった。

その時にフィスケさんが土手の上で、赤松さん達の攻撃隊の来襲を知らせたラッパを吹き、みんなのアンコールに応えて再度ラッパを吹いてくれたのが印象深かった。

この三本の桜は翌年から花を咲かせ、私達はその花を押花にして、咲いた樹の写真も添えてそれぞれ植えてくれた人達に毎年送って友好を温めている。

§

ハワイからこの三人が来訪した時に、友人としての交流にとどまらず、この際もう一歩進めて真珠湾攻撃発進の地の佐伯市と、攻撃を受けた真珠湾を抱えるホノルル市との間に、恩讐を超えた友好契約を結んだらどうかということになった。

赤松さんが中心になり、海原会の吉田次郎さんにその橋渡しをたのんだ。

ハワイに幅広い人脈を持つ吉田さんの献身的で誠実なお世話により、途中いろいろと思いがけぬ紆余曲折は

あったが、平成十五年十二月佐藤市長の時にようやく実現する運びとなった。

おそらく歴史上でも世界に例のない和解友好の都市契約であろう。

赤松さんはその年の夏に自転車で転んで大腿骨を折るというアクシデントがあったが、それに屈せず娘婿の高橋仙市さんの押す車椅子に乗って佐伯市からの一行四十数人の人達と一緒にハワイに行った。

十二月九日（日本時間）ホノルル市庁舎で、ホノルル市長のジェレミー・ハリス市長と佐藤市長との間に友情都市契約（フレンドシップシティ）が調印されるのを赤松さんは目のあたりに確認した。

「赤松さんの目の黒いうちに」という私達の切なる願いも叶えられたのである。

同席させてもらった私もあの場面は生涯忘れることはないだろう。

※その日吉田さんのお取計らいでフィスケさんの自宅を私達六人で訪問した。

前立腺ガンで自宅療養中のフィスケさんはその日はやや小康状態だったらしく、アパート五階の自宅で奥さんと二人で迎えてくれた。

苦しい闘病生活でかなり憔悴しているようだったが、吉田さんの通訳で本日佐伯市とホノルル市との間に友情都市契約が調印されたことを聞き「それは当然のことだ」と言ってよろこび赤松さんと抱き合って友情を確かめ合った。

そして「必ずなおってまた佐伯に行く」と言い、帰る時にはヨチヨチ歩きながら階下まで下りて見送ってくれた。

※赤松さんは友情都市契約調印確認とフィスケさんのお見舞をしたことでわざわざハワイにきた目的は果たすことが出来たとよろこんでいた。そしてハワイ滞在中も帰りの飛行機の中でも特に変わった様子もなく佐伯に帰ってきたが、わが家にゆっくり落ちつく暇もなくすぐに入院した。

何かにつけても「痛い」とか「きつい」などと弱音を吐いたことがなく、またそれを外に現わしたことのない人だったので、旅行中も随分きついのを我慢してい

たのではないかと思われる。そして、年が明けるとすぐに意識を失ったという知らせを聞き、祈るような気持ちで心配していたところ、息子さんから意識が戻りつつあるということを聞き、奇跡を願っていたが一月九日遂に帰らぬ人となった。

友情都市契約調印から丁度一ヶ月目である。

私達としては、せめてもう三年くらいは生きてハワイとの友好交流を見守って欲しかったと思い痛恨の極みであった。

大願であり夢であったホノルル市との友情都市契約が実現し、その調印を目のあたり確認できたのがせめてもの救いだったと私達も自らを慰めている。

ハワイで日本人新聞記者から赤松さんの訃報を聞いたフィスケさんは「おお神よ！」と言って歎いたと言う。そのフィスケさんも赤松さんの後を追うように同じ年（平成十六年）の四月二日に八十二才で世を去った。

人間が大きく、ふるさと佐伯の歴史に国際友好の大きな足跡を残してくれた赤松さんのご冥福を心からお祈りし、併せてフィスケさんの御冥福をお祈りするものである。

次は平成十六年一月十一日の赤松さんの葬儀の際の私の弔辞である。

## 弔　辞

赤松さん　こんなに早くお別れの日が来ようとは思ってもみませんでした。

永年の夢でありました　佐伯市とホノルル市との都市契約調印式に立会い、それを見届けて無事に帰ってきたことをよろこび合った矢先　息子さんから「意識不明」とのお話を聞き　一瞬頭をガンとなぐられたようでまさに青天の霹靂でした。

ハワイ旅行中の1週間、気を張りつめていたものが帰国した途端に疲れと達成感の安心が一緒に出ての結果ではなかろうかと心を痛めております。

思えば太平洋戦争開戦の日　昭和16年12月8日未明、九七艦攻に搭乗して空母加賀から飛び立ち　真珠湾攻撃の第1次攻撃隊の雷撃隊として参加しアメリカ戦艦に魚雷を命中させるという偉功を立て、翌昭和17年6月の

ミッドウェイ海戦では乗艦加賀を撃沈され爆風で頭部に負傷しながらも大きく傾く飛行甲板から30メートル下の海面に跳び、泳いでいるところを味方の駆逐艦に救出されるというきわどいこともあったと聞いております。

その後も珊瑚海海戦にも参加し　終戦の年昭和20年には鹿児島県の串良基地から出撃して　沖縄周辺の海を埋めるアメリカ艦船に至難の夜間雷撃を度々敢行するという離れ技を演じてきたとのことでした。

このように熾烈な戦闘に際しても沈着冷静、臨機應変、搭乗員としての抜群の技量を発揮するというタフな精神をもって日中戦争から太平洋戦争を勇敢に戦い抜き生き抜いてきた旧海軍にも数少ない国宝的な存在でありました。

終戦により無事復員し佐伯に定住されてからも交通安全など地元社会のために大いに活躍されておられたように伺っております。

若い時から海軍の搭乗員として特にきびしい訓練を受け、その時に培われた精神力に加えて生来の行動力太っ肚な包容力　企画性のある指導力を十分に発揮して人々の信頼を得ておりました。

私があなたと知り合ったのは平成3年頃の歴進会結成以降ですが、それまでにも蒲鉾工場の前などで時折見かけてはその眼光に「この人は平凡な人ではないな」との思いを抱いておりました。

お知り合いになってからもそのお人柄に魅せられて何でも相談させていただいてきました。

旧海軍の搭乗員の中でも空母搭乗員は　そのすぐれた技量により「母艦屋」と呼ばれて特別な存在だったようですが、赤松さんはまさにその「母艦屋」として明るく豪放な行動力にみちた搭乗員気質をそのまま残しており私は畏敬と尊敬の念を抱いてきました。

平成9年の平和祈念館開館の前から、真珠湾攻撃の時にあなた達を迎え撃ったアメリカの退役軍人会との交流を重ねてその人達との友情を育み　平成11年にはリチャード・フィスケ　デンバー・グレイ　またハワイの大学教授のジョン・デバジリオの3氏を佐伯に招き大入島の海人夏館に泊ってもらい祈念館の裏庭に手をとり合って「友好の桜」3本を植樹するという大きな行事を行いました。

その時にこの友情をもう一歩進めて佐伯市とホノルル市との都市契約を結ぶよう運動しようということになり東京の「海原会」（旧海軍飛行兵の全国的な組織）の特に吉田次郎氏の誠実かつ献身的なお世話によって交渉を進めてまいりました。

翌平成12年には「こども太鼓を連れてきて欲しい」とのハワイからのたっての要望に、さまざまな困難をあなたの努力で克服してこども太鼓一行を伴なってハワイを訪問し現地の太鼓グループとの共演などでハワイの市民や退役軍人達に多大な感銘を与え、また州知事や副知事をも表敬訪問して佐伯市民としての強い意向を伝えて佐伯市とホノルル市との契約環境をつくってきました。

それ以後いろいろと紆余曲折がありましたが、佐藤市長になってからいよいよ佐伯市とホノルル市との間にフレンドシップシティ（友情都市）という都市契約を調印するという夜明けを迎えました。

あなたはこの立会のためのハワイ旅行直前に自転車でころんで大腿部骨折というハプニングがありましたが、これも生来の明るさと精神力、行動力で克服して高橋仙市さんの押す車イスに乗って参加しました。

この旅行で印象的だったのは現地12月7日の開戦記念日のパールハーバー式典の時、かつてパールハーバーで戦った退役軍人達や現地の多くのマスコミ、市民からの握手や取材、サイン攻めに会い遂に感きわまって顔をおおって泣くという場面でした。

今は波静かなパールハーバーの岸辺で、62年前のあの若き日のことを思い来し方のさまざまなことも思い出されて「さもありなん」と私も一緒に涙を流しました。

そして現地翌8日のホノルル市役所での調印式にのぞみ佐藤市長とハリス市長の調印を目の前で確認し感慨も一入だったと思います。

私達もお互いに年を重ねる中で「調印は赤松さんの目の黒いうちに」ということを何よりの願いとして祈り続けてきました。その赤松さんが見守る中で調印が行われました。切なる願いは遂に達成されました。

赤松さんも、その達成感に満足すると共にこれから先の両市の交流についての夢も多かったのではないかと思います。また一番気にかけていた病気療養中のリチャード・フィスケさんを自宅に訪ねて抱き合って再会をよろこび合い、これですべてハワイ訪問の願いは叶えられた

とよろこんでおりました。そして何とか事故もなく12月12日午前1時ごろ佐伯に帰ってきましたが、張りつめていた気持ちがゆるんだこともあってかすぐに長門病院に入院されておりました。

私が病院にお伺いした時には至って元気で「疲れただけでどこも悪くはない」と云っており、私も安心しておりました。その時私は「赤松さん、人間は夢をなくしたらおしまいです。まだまだこれからの夢も一杯あるじゃないですか。これで万事終われりと思わず心に張りをもって下さい」と言って別れました。思えばあの時があなたとの最後の会話になってしまいました。私には私達のグループの誇りであり、また佐伯市の誇りであった赤松さんを、佐伯市の「名誉市民」に推薦したいという夢もありました。

その夢を実現できないまま逝かれたのは何とも残念でなりません。一応あなたは永年の夢を実現したことで「以て瞑すべし」ということになるのでしょうが、私は自分の肉親を亡くしたと同じようなむなしさとあきらめきれない悲しみを抱いております。

息子さんから一時は快方に向かいつつありとのお話を聞いて跳び上がってよろこびましたが、あれはあなたが生命の最後の輝きを示したものだったのでしょうか。

ああ　あの温顔　温容　再び見る　あたわず、名残は尽きません。

『大いなる夢成し遂げて巨星墜つ』

赤松さん亡き後は心の柱を失ったような思いですがこれからの夢の実現に、私なりに頑張っていきたいと思います。

どうか安らかにお眠り下さい。

平成16年1月11日

桧垣七郎

ハワイのフィスケさんの自宅にて
リチャード・フィスケさん
赤松勇二さん